

手続きの記号化：「やはり・やっぱり」の場合*

武内道子

0. はじめに

Grice の会話の推意以来、語用論の研究イコール発話の非明示的側面、すなわち推意の研究という図式が支配的であった。しかしながら形式の明示的側面、発話の表出命題、Grice の言葉で言えば what is said の側面も劣らず語用論で扱われるべき重要な課題である。関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/95) は両者は話し手の伝達しようとする意味の車の両輪であり、後者の考察なくして前者の一貫した考えは持ち得ないことを体系付けた (Carston 2002)。これが関連性理論の第1のチャレンジであるとする、本小論は第2のチャレンジに関するものである。言語形式の意味は発話の真理条件、すなわち命題形成に貢献するものであるという従来の意味論へのチャレンジである。認知語用論の考える意味論は、形式とそれが記号化している認知的情報との関係の意味し、言語表現の中には真理条件的に定義されないものがあると考え。このことは語用論へのインプットとなる形式の記号化された意味について、まったくタイプの異なる2種を区別することになる¹⁾。

本小論は「やはり」を取り上げ、Grice が慣習的推意によって説明し、Blakemore が手続き的記号化を導入した、2事象間の因果関係、2命題間の推論関係を明示的に表す談話連結語の意味役割について議論しようとするものである。4点を議論したい。

- (i) 「やはり・やっぱり」(以下説明のときは「やはり」で統一)を談話連結語として捉えることの正当化。
- (ii) 手続きを記号化していること。
- (iii) どんな手続きか? 話し手が「やはり」の使用によって伝達しようとする意図している意味は何か?
- (iv) 手続き的記号化は、当初 (Blakemore 1987, 1992) の考えから拡張される方向で、修正される必要があるという Blakemore (2000, 2002) の考えを応用する。

1. 先行研究

「やはり」の意味機能については国語学者の間で議論を呼んできた。たとえば、森本(1994)は話し手の主観的態度を表明する副詞といいながら純粹に意味論的に捉える。また、談話分析の立場から、高見(1985)は表出命題への話し手の態度ないし命題内容についての話し手のコメントまたは判断を示す副詞とし、一方、discourse modality indicatorの一つとして扱っている Maynard(1993)は話し手の個人的態度および感情の表明であると明言している。西原(1988)は、Griceの会話の含意を用いていると言う意味で、語用論的観点から分析しているといえる。Tanaka(1997)は関連性理論の枠組で分析を試み、主に西原の議論の中でコンテキストの重要性を例証している。語用論的前提という概念、すなわち話し手と聞き手に共有された背景的想定を含むことに「やはり」の機能があるという西原の主張を踏襲し、「やはり」節の解釈されるコンテキストへの言及が中心をなすと明示的に述べる²⁾。

Tanakaの問題点として二つのことを指摘したい。一つは先行研究同様「やはり」を副詞として扱っていることである。副詞であるか談話連結語であるかという品詞のカテゴリーが重要な論点であるというのではない。人間は二つの命題が提示されたら、自動的に両者の関係をつけるものであるが、特定の推論関係を誤りなく聞き手に明示する言語表現の一つとして「やはり」を捉えるという観点を明確に表明するということである。もう一つは、コンテキスト選択に特化している表現として捉え、手続きの意味を記号化していると述べながら、どんな手続きをエンコードしているのかという問いに Tanaka は明示的に答えていない。「やはり」を使用することによって、話し手が聞き手にどういう推論関係をポイントしようとしているのかに答えたい。本稿は Tanaka(1997)を出発点として、その上に積み重ね、この二つの点を明らかにしようとするものである³⁾。

2. コンテキスト

本稿は「やはり」を談話連結語として捉える。(1)に示されるスキーマの中で「やはり」の意味機能が捉えられると考える。

(1) P。やはり Q。

つまり、PとQという2命題間の推論関係を明示する連結機能を有する表現であるとする。どういうコンテキストに現れるかを、PとQおよびPと関係付けられる想定をRとして、三つ巴で考察する。具体的には(2)に示されるような処理を受け、適切な関連性を有することになる。

(2) 「やはり」節の関連性

- (i) Pからの非明示的問いへの答えとして関連性がある（「やはり」節の認知効果）。
- (ii) 「やはり」の使用によってその答えを提供することになる想定Rが呼び出され、これをコンテキストに取り入れ、そこで処理される。
- (iii) Rは問いへの答えと同様の（似た、整合する、矛盾しない）想定である。

(2) で示されたプロセスを例文によって見てみよう。使われる例文は (3)―(9) である。

- (3) 映画に行こうかと思ったけど、やはり行かなかった。
- (4) A：お客さん、大勢になるわ。
B：やっぱりピザ作るわ。
- (5) (アジア大会の対韓国戦の野球試合について)
向こうはプロチームだから、やっぱり日本はこてんばに打たれて負けたよ。
- (6) (ワールドシリーズへのプレイオフのことで)
A：やっぱりダイヤモンドバックスとヤンキース、両方とも負けたね。
B：やっぱりって？
A：宏樹が去年の覇者が両方とも負けるって言ったんだ。僕はヤンキースは勝ち方を知っているからわからないよって言ったんだけどね。
- (7) (コマーシャル：一人の女性が窓辺に立ち、外のグラウンドで元気に走り回る子供たちを眺めながら、グラスに入った牛乳を飲む)
女性：やっぱ、牛乳でしょ。
- (8) A：あの人結婚するんだって。
B：やっぱり！
- (9) (遅刻の常習犯であるAが約束の時間に遅れて現れたのを見て)
B：やっぱりね。

まず、PもQも明示的である(3)―(5)から考えよう。(3)において、「映画に行こうと思った」から問いとして「行ったのか」が潜在的に発せられ、否の応答がQに関係付けられる。一方、「やはり」の使用から「映画に行こうと思った」と関係付けられる想定Rとして「行かない可能性がある」が呼び出され、これをコンテキストとして「やはり」節を処理し、Qが予期された帰結であることを伝える。(4)においては、「お客さん大勢よ」を発することによって「食べ物足りるか」をAが(潜在的に)問い、否の応答がQの内容と(間接的に)一致する、あるいは矛盾しないことになる。一方、想定「食べ物が充分でないかもしれない」がPと関係付けられ、これをコンテキストとして「やはり」節が処理されることになる。Q

からの推意と一致する、つまり Q の命題内容と間接的に一致する（整合する）ことになり、Q が帰結として解釈される。(5) も同様である。先行する発話「韓国チームはプロチームである」から問いとして「歯が立たなかったか」が潜在的に発せられ、同時に、「やはり」の使用が「勝てないであろう」という想定 R を呼び出し、これをコンテキストにして「やはり」節を処理することになる。予期したように勝てなかったことを結論として伝えることになる。

次に P が明示的でない場合を考えてみよう。この場合問いは発せられない。(6) において、妻 B は夫 A の発話が処理されるコンテキスト R を呼び出せなかった、つまり P をシェアしていなかったというわけで、B の発話は R を問うものである。A の第 2 発話が示すように、明示的でない P は、息子の宏樹が「ダイヤモンドボックスとヤンキースがともに負けると予測した」ことで、関係付けられる想定 R として「宏樹の予測は正しかった」が呼び出され、「やはり」節の処理されるコンテキストとなる。これは Q と整合するもので、「やはり」節の命題内容が予測されたことであったことを伝えることになる。次の (7) も P が明示的ではないから、問いは発せられない。しかし視覚的状况 P から関係付けられる R として「健康には牛乳が良い」という想定を視聴者はコンテキストとして呼び出し得る。Q と整合するものであり、やや間接的帰結「牛乳を飲みましょう」を、コマーシャルの送り手の意図として伝えることになる。

次は Q が明示的でない場合である。(8) において、P から「知っていたか」という問いが発せられ、Q はその語の応答と等しいものである。一方 P と関係付けられる想定として「そんな気配があった」という B の思いを、「やはり」の使用から A が呼び出し、「B がそう予期していた」ことを帰結として伝える。

最後の (9) は P も Q も明示的でない例である。しかし、P は目の状況「A が遅れてやってきた」ということで、関係付けられる想定として「いつもの通りだ、相変わらずだ」が「やはり」の使用によって呼び出され、コンテキストとする。帰結として「今日も遅れてやってきた」ことを伝えることになる。

P からの問いというのは常に非明示的なものである。P からの推意として導出される R がその応答となるという説明は余剰的かもしれない。P からの推意 R が Q と整合するということが済むとも考えられよう。しかしながら、たとえば (4) や (8) のような例の場合は意味があると思われる。(4) において、A は客が大勢であるという発話によって食べ物足りるかどうかという思いを伝達し、一方 B は A の発話の推意として食べ物足りないかもしれないという想定を持つ。「やはり」を使用することによってこの想定 (R) を A に取りこませ、R をコンテキストにして「やはり」節の解釈に当り、同時に自分の問いに対して満足すべき応答が得られたと思うのである。また、(8) においても、知っていたかという非明示的問いは、A が自分の発話 P によって B に伝達したい、答えてもらいたい思いである。「やはり」の認知効果は、聞き手が持った問いに対する応答を得たというところにある。一方、P が非

明示的である場合は効果というよりはむしろ、「やはり」節を処理するコンテキストを提示する意味がよりポイントされるということを示唆したい¹¹⁾。

3. 手続きの記号化

ここで言語形式が手続きを記号化しているとはどういうことかを考えてみたい。Grice は、so, after all, moreover といった談話連結語を慣習的推意として扱っている。慣習的であるということは、つまり言語的に記号化されているということであり、同時に推意であるということは命題的である。慣習的推意の概念を受け入れるということは、その表現が何か命題的なことを記号化しているということを受け入れることである。

話し手は (10) のような一つの語を使って命題を表明することがある。コンテキストによって、(11) にあるような命題を伝えるであろう。しかし、(11) は (10) によってエンコードされてはいない。

(10) コーヒー。

(11) a. コーヒーを飲みたい。

b. コーヒーが切れちゃった。

c. コーヒーを買ってきて。

d. コーヒー豆をひいてるの。

(10) は富化 (enrichment) という推論操作によって、関連性の原則に制約を受けながら、構築されるものである。このことが示すことは、談話連結語の概念的説明が受け入れられるのは、富化過程によって復元される命題表示の構築物である概念をエンコードしているものとして扱われるときである。しかし、概念をエンコードしているとしたら、どんな概念なのか？ Wilson & Sperber (1993) も指摘しているように、談話連結語というのはいずれも概念によってポイントすることが難しい。「やはり」の意味を外国人に説明することはわれわれにとってきわめて難しいであろう。

一方、(12) の発話を考えてみよう。ある学生 A が期限に MA 論文を提出しなかったことを同僚が告げたとき、私の言ったことと思ってほしい。私は「やはり」の一語で命題全体を伝達したのである。私が聞き手に復元することを期待した命題は、たとえば (13) のようなものである。

(12) やっぱり。

(13) 彼は MA 論文を出さないのではないかと危惧していた。

- (14) やっぱり彼は論文を出さなかった。
- (15) a. 去年も書けないで出すのをあきらめた。
 b. あまり大学へ来ていなかった。
 c. 聞いても論文のことを話すのを避けていた。

(13) は「やはり」がエンコードしている命題ではない。またエンコードされた低次の発話行為による命題でもない。低次発話行為がないのである。しかし聞き手は (14) を発することを意図したかのように、(12) を解釈するであろう。そうであるとする、(12) は (10) と同様に省略された、あるいは不完全な発話となるのか。答えは否である。(12) はそれ自身そのまま完全な発話である。(14) は聞き手が復元するよう期待された命題ではあるが、同時に聞き手である同僚は、たとえば (15) の想定の一つあるいはいくつかを構築することもありうるのである。(15) の三つに限らず、正しい認知効果を生じせしめる限りにおいて構築するのである。しかしその範囲は「やはり」によって制約を受ける。話し手は、聞き手が関連性の原則に一致する認知効果を生じせしめる命題を構築してくれることを期待する。談話連結語というのは、それがエンコードしている制約を満足させる効果を活性化しよう意図されたものである。これが手続きを記号化しているということである。

では、「やはり」はどんな手続きを記号化しているのだろうか。「やはり」発話の貢献はどこにあるといったらいいのか。

談話連結語 *but* と *nevertheless* をもった発話を考えることから始める。一連の Blakemore (1987, 1992)、および Iten (2000) によれば *but* のエンコードする意味は (16) に示されるものである。

- (16) *But constrains the inferential rout which ends up in the denial of an assumption derived from P: cognitive effects achieved*
- (17) a. *It was raining, but Peter went out.*
 b. *It is raining, but I need some fresh air.* (Iten 2000)

(17) において、(a) は前件 P から「人は出かけたくないものだ」(あるいは Peter は出かけないだろう) といった想定(推意)を導き出し、*but* の使用はそれが後続発話と矛盾することを教え、従って削除するよう推論の行きつく先を聞き手にポイントする。推論の行きつく先が矛盾と削除という効果であることを指し示す手続きをエンコードしている。また (b) は、前件 P から「散歩に出かけたくない」といった想定が推意として導き出され、それが後件 Q から導き出された想定「散歩したい」と矛盾すること、したがって削除することをポイントする。

一方、nevertheless 発話は、If P, then \sim Q という文脈想定を引き出すことをポイントすることによって、関連性を有すると説明する (Blakemore 2000, 2002)。

(18) *Nevertheless* : The inferential rout between P and Q involves deriving a contextual assumption "If P, then not Q.": context selection

(19) A : She's quite intelligent.

B : Nevertheless she's not really what the department needs at the moment.

(Blakemore 2000)

(20) (The speaker has just found the hearer eating the last slice of pizza.)

But /* Nevertheless I told you to leave some for tomorrow.

(Blakemore 2000)

(19) は学科のポストに誰かを据える、適当な人についての話としよう。nevertheless の使用は、A の発話 (P) から「彼女を登用するだろう」が呼び出され、これが nevertheless 発話 (命題内容) と矛盾することを伝える。「頭がよい人であれば、登用するであろう」というコンテキストで、Q を解釈する。つまり、P から非明示的に「彼女を登用するか」(Shall we appoint X?) という問いが発せられ、「P だから雇うであろう」(問いへの Yes の応答) をコンテキストとして、No の応答である Q の解釈を行う。問いへの答えとして理解される反対の答えを提示するものとして Q が関連性を有する。この認知効果は、反対の証拠 \sim Q (頭がいいのは欲しくない) を提供するコンテキストで引き出される情報をエンコードしている。したがって P が明示的でない (20) の場合、この問いが発せられない、また「P ならば \sim Q である」というコンテキストが作られ得ないから、容認されない。But が容認されるのは、視覚的状况から「全部食べてしまった」ということが呼び出され、これが but 節の命題と矛盾し、削除することになる。Nevertheless の場合、前節から呼び出される想定を否認するという効果と結びついてはいるが、同時にこの効果が復元されるコンテキストに制限を加えることによって関連性を有すると主張する。特定の推論の道筋をポイントし、よって到達する効果に制約を課すというよりは、処理されるべき文脈想定活性化に制約を課す表現であるということである。

Blakemore (2000, 2002) は Blakemore (1987, 1992) で提示した手続き的意味の概念を広げることが必要である、当初考えられていたよりもっと複雑であると論じる。

(21) This account of the differences between *but*, *however* and *nevertheless* is ... that a discourse connective may have a cluster of functions some of which may be shared by other connectives. Thus while the function of contradiction and elimination is shared by all these expressions, *however* and *nevertheless* have additional functions which are not encoded by

but. The point is that these additional functions which must be defined in terms of restrictions on the contexts in which the cognitive effect of contradiction and elimination is achieved, and hence that the notion of a semantic constraint on relevance is more complex than the one proposed in my earlier work (Blakemore 1987). (Blakemore 2002: 128)

(21) で述べられているように、二つの連結語は共通の機能を有している一方で、nevertheless は *but* がエンコードしていない追加的機能をエンコードしている。この追加的機能というのは矛盾と削除という認知効果の達成されるコンテキスト選択にかかわるもの、コンテキストへの制約によって定義されるものである。

そこで、「やはり」のエンコードしている手続きとは、への答えとして (22) を提示する。

(22) やはり : Suspend an inference from P which would result in some accordance with *yahari* clause.

すなわち、「やはり」節と何らかの一致に至ることになる P からの推論を保持せよ、というものである。保持してこれをコンテキストとして「やはり」節を処理せよということである。「やはり」節は先行発話の解釈によって発せられた問いへの答えとして理解され、同じ問いへの答えとして矛盾しない想定を含むコンテキストで関連性が有る。特定のコンテキスト選択をポイントする、すなわち意図されたコンテキストへの制約を課す言語表現である。「やはり」節が予期されたことである、つまり一種の強化という認知効果と結びついてはいるが、同時に、この効果が復元されるコンテキストに制限を与えることによって関連性を有すると主張したい。

ここに、否認や強化や結論といった特定の効果に制約を課す表現と、処理されるべき文脈想定活性化に制約を課す表現を区別する。もちろん前者も特定の推論の道筋をポイントするし、後者も効果と結びついてはいる。「やはり」は後者に属するものであることを提示した。この手続きの二つの区別は、手続きの意味が、認知効果と処理労力という関連性の原則を規定する二つの要素とまさにリンクしていることを示すことになる。一般的に、類似の意味を持つ連結語の違いは、一方は意図された効果への制約を課し、他は意図されたコンテキストへの制約を課すと Blakemore (2002) は示唆する。

単語が記号化している情報として、概念的情報と手続き的情報の2タイプがあり、前者は論理特性を持ち、真理条件に貢献するのに対し、後者は解釈の仮説を立てるのを助ける手がかりを与えるものである。この区別は Blakemore (1987) によって提唱されたが、当初は手続きの記号化は非真理条件的内容への制約とイコールであった。やがて明示的内容(表意)への制約へと広がりを見せ、さらに概念を記号化しながら概念表示に関わらない形式の

存在をも例証することになった (Wilson & Sperber 1993; Ifantidou-Trouki 2001)。次のステップとして、ここに手続き的情報の概念そのものが精密化するに至ったのである。Blakemore (2000, 2002) では、コンテキストを特定化する情報をエンコードしているものの存在を指摘し、発話による推論処理のあらゆる側面への制約を含むよう初期の考えが修正されてきている (手続き的情報の理論内での変遷については武内 2002 参照)。

4. 推意への制約と帰属された思考

最後に、「やはり」が推意への制約を課すことに触れよう。(23) を見てみよう。

(23) A：あの人自殺したんだって。

B：やっぱり。

A：何がやっぱりなの？

(Tanaka 1997)

(24) 話し手は健が自殺をするような気配があったことを知っていた／聞いていた。

(25) 話し手は健が自殺するかもしれないと予期していた。

(23) B は A の第 1 発話に続くものとして自分の発話を意図している。B の発話解釈のために聞き手 A が呼び出すべき正しいコンテキスト (24) をポイントするという機能を有する。そこで (23) B の聞き手である A は「やはり」によって (25) のような結論を導く。この推意は A の応答、すなわち A の第 2 発話を、話し手 B がなぜ健が自殺したかもしれないと考えたのかをたずねることになる。(23) B の話し手になぜそう考えたのかを答えるのに逃げ道を作ることになる。「やはり」の使用によってその予期が自分自身のものであることを否認する、ひいては特定の予期の源泉をあいまいにする、つまり過去の自分も含めた他人に帰属させるという効果がある。このことは談話における「やはり」の多用 (西原) を説明することになる。また「やはり」は一種の垣根言葉 (hedge) として機能するとも言えよう。

「やはり」のある、ないを考えてみよう。

(26) A：結果はどうでしたか？

B：いけるかと思ったんですが、a. だめでした。

b. やはりだめでした。

(27) A：結果はどうでしたか？

B：だめかと思いましたが、a. うまくいきました。

?? b. やはりうまくいきました。

(26b)において、「やはり」の使用によって、先行発話P「いけるかなと思った」から「だめかもしれない」という一種の期待感（ネガティブな）が導き出され、それを結論として伝えることになる。(26)と(27)の違いはこの「期待」の内容にある。(26b)において「だめかもしれない」という想定は、話し手B自身の見解であるというよりは自分以外の第3者の想定、つまり自分の能力などについての総合的理解から失敗することが予期されるのは普通のことと考えている。すなわち自分は成功を望んだが、社会的、慣習的知識に照らして、失敗が予期されるものであったこと、それに自分も気がついていたことを伝える。他者に帰属させた考えであることを「やはり」の使用が伝えるのである。

他人に考えを帰属させるということは、その考えから距離を置くことであり、一種の逃げ口上の意味を伝えることになる。(27)において「やはり」の使用が容認されないのはこのためである。先行発話P「だめかなと思いました」から呼び出される想定は「うまく行かなかったのだろう」である。(27b)において「うまくいった」という期待感を「やはり」が呼び出せない。「うまくいく」という肯定的な想定を他人の考えに帰属させることが出来ないことを示しているといえよう。自分では「だめだ」と思いながら、うまく行ったことを他人の考えにあるとすることは人間の行動として不自然である。他人に考えを帰属させるということは、その考えから距離を置いて自分と切り離すということである。うまくいったこと、すなわち肯定的な考えは距離を置く必要も、自分から切り離す必要もなく、堂々と訴えればいいのである。このことは「やはり」節がどこか否定的な意味合いを有するという直感と一致する⁹⁾。「やはり」を使用することによって、特定された期待感の源をはっきりさせないで、ヴェールをかけた状況におくことになる。(26b)の話し手は「だめだった」ことをAと分かち持つことになる。言いかえると、思いつめた状況についてBの側へ一種の風穴を開ける効果をもたらすと考えられる。

4. 結語

「Pである。やはりQである。」と言うスキーマで捉えることによって、「やはり」の意味と機能が一樣に説明されることを示した。Pと関係付けられる想定Rをコンテキストとしてポイントし、「やはり」発話の命題内容QがRと矛盾しない（整合する、一致する）ということ、Qが話し手の意図した結論であることを伝える。つまり特定のコンテキストを活性化し、特定のコンテキスト選択を算定させ、意図された認知効果へ導くという手続きの情報を記号化している。非真理条件的であり、推意に制約を課す言語表現である。「ある種の期待、予期に言及するという直感、as expected（時にはnaturally, you know）と翻訳されることを示す」（Tanaka 44）という以上の、統一された分析を可能にし、説得的な説明ができたと思う。

私の興味の中心は、形式と語用論的解釈のかかわりである。特定の言語表現を用いることによって話し手がいかに語用論上の効果を達成しようとしているのかという問いである。談話の1部である発話が先行、あるいは後続する発話解釈に何らかの形でつながって解釈し得ると考えるのは、人間の言語使用上当然のことである。言語情報の意味確定度不十分性 (Carston 2002) を考えれば、発話から話し手の思考を推測する際の手がかりがいかに有用であるかは明らかである。「やはり」によって言語使用の興味深い側面が示されたと思う。他に、「どうせ」(Takeuchi 1999)、「どうも」(武内 2000)、「どうぞ・どうか」(武内 2001)、「どうやら」、「さすが」、「しょせん」、「まさか」など、意味をピンダウンできない副詞を談話連結語として分析し、いかなる手続きをエンコードしているかを考察することによって、日本語用論の面白いところが見えてくると思われる。

*本稿は日本語用論学会第5回大会で口頭発表したものに加筆、修正したものである。採用に当って、3人の査読者から提案と批判を含めた有益なコメントを頂いたことに謝意を表したい。また間違い、思い違いがあれば筆者のものである。

注

- 1) 関連性理論の二つのチャレンジに関して、武内 (2003) が and と but によって車の両輪としての全体像を概説している。
- 2) これらの先行研究については Tanaka (1997) に詳しい。
- 3) 「やはり」が命題間の関係を指示する働きを有するという主張は蓮沼 (1998) にもある。
- 4) Pが何らかの問いをもたらすという考えの正当化については、今後更に考えてみたい。
- 5) もちろん「やはり」節は常に否定的意味合いを表すわけではない。たとえば「うまくいくと思っていましたが、やはりうまく行った」という場合、(26b) とは対照的に、Pからの問い(うまく行ったか)も、Pと関係付けられる想定R(うまく行った)も、したがってQも完全に一致する。Pから導出される推意がネガティブな想定であるところに「やはり」使用の特徴があると思われる。文字通りの「予期した通りに」という肯定的な例では、Pからの問いの正当化は意味があるとは言えないかもしれない。

参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1989. *Understanding Utterances: Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一 (訳) 『ひとは発話をどう理解するか：関連性理論入門』1994. 東京：ひつじ書房) .
- Blakemore, D. 2000 "Procedures and Indicators: 'Nevertheless' and 'But'." *Journal of Linguistics* 36: 3, 463-486.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Carston, R. 2002 *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- 蓮沼昭子. 1998. 「副詞「やはり・やっぱり」をめぐる」『ことばから人間を』133-148. 東京: 昭和堂.
- Ifandou-Trouki, E. 2001. *Evidentials and Relevance*. Amsterdam: John Benjamins.
- Iten, C. 2000. *Non-truth-conditional Meaning, Relevance and Concessives*. University of London. Ph.D. Thesis.
- Maynard, S. 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Amsterdam: John Benjamins.
- 森本順子. 1992. 『話し手の主観を表す副詞について』東京: くろしお出版.
- 西原鈴子. 1997. 「話者の前提: やはり (やっぱり) の場合」『日本語学』89-99.
- Sperber, D. and D. Wilson, 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他 (訳) 『関連性理論: 伝達と認知』東京: 研究社出版).
- 高見健一. 1985. 「日英語の文照応と副詞・副詞句」『言語研究』87. 68-94.
- Takeuchi, M. 1997. "Conceptual and Procedural Encoding: Cause-consequence Conjunctive Particles in Japanese." In Rouchota, V. and A. Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*, 81-103. Amsterdam: John Benjamins.
- Takeuchi, M. 1998. "The Japanese Adverbial DOOSE." *Kanagawa University Studies in Language: Festschrift for the Retirement of Prof. Tetsuya Kunihiro*. No. 22. 13-30.
- 武内道子. 1999. 「「どうも」と関連性」『ふじみ』第21号 富士見言語文化研究会. 31-40.
- 武内道子. 2000. 「「どうぞ」と「どうか」: 命令発話への制約」『神奈川大学言語研究』No. 24. 75-89.
- 武内道子. 2002. 「関連性理論の意味論」『英語青年』第148巻 第4号 (2003年1月号) 36-37.
- 武内道子. 2003. 「AND と BUT : 関連性理論の意味論と語用論」『神奈川大学言語研究』No.25. 59-96.
- Tanaka, K. 1997. "The Japanese Adverbial Yahari or Yappari." In Carston, R. and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 23-46. Amsterdam: John Benjamins..
- Wilson, D. and D. Sperber, 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90:1/2, 1-26.